

連載  
講座

第31回

## 炎にも生命があるのか

作家 童門冬二

ずいぶん前だが、ロバート・デ・ニーロ主演のアメリカの消防職員の活躍を描いた映画を見た。映画の1シーンが気になって、その後も何度も見直した。そのたびに気になるシーンは、最初感じたことがいよいよ正しい、と思うようになった。

そのシーンというのは、あるいは映画でのカメラ操作によって、私の感覚がそう感ずるよう仕向けられているのかもしれない。しかし私は（そうではない。この感じは正しい）と、頑（かたく）なに自分の受けとめ方にしがみついている。では何を感じたのか。

ひとことでいえば「火災時における炎には自らの意志がある」ということである。つぎつぎと燃え移る炎には、あきらかに燃え移ろうとする意志がある、自分の意志で燃焼行動をしている、という実感だった。だから炎（火）は生きている。生命を持った物体なのだ、と感じて恐しくなった。

そういう感覚でとらえれば、山も川も土も水も空気もみんな生きている。生命と自分の意志を持っている。ことし南九州を中心に襲った大雨も、それなりの雨の意志の表れだったのだろうか。自然の行動は予測ができない。しかし一回起れば災害に対して人間は迅速な対応をしなければならない。

「ぜったいに起らないでほしい」といつもねがいつつも、起った時には即時対応をする、という宿命の心がまえを求められる職員には、常人とは

違った気持を求められる。その気持とは「協同の心」だ。

「自然には生命がある。私の師は土だ、水だ、風だ」といって「自然に学ぼう、自然は私の師だ」と農民たちに告げ、農村改革を指導したのは二宮金次郎（尊徳）だった。かれは小田原（神奈川県）近くの栢山（かやま）村で生れ育ったが、少年時酒匂（さかわ）川の氾濫で家も田畑もすべて流失してしまった。そのショックで両親も死んでしまった。あとに幼ない弟がふたり残された。金次郎は自力で弟たちを養ない、家を復興しなければならなかった。

かれは叔父の家の農業や家事を手伝い、山の枯枝を束ねて背に負い、小田原まで売りに行った。その往復に1冊の本を読んだ（この姿は昔公立学校の庭で銅像になった）。本は古代中国の教養書「大学」である。この本をくりかえし読むかれはふたつのことを学んだ。ひとつは「人間の生涯の生き方」、もうひとつは「譲の精神」だ。「人間の生涯」について「大学」はその生き方をつぎのように示している。修身（個人の修養）齐家（家庭の確立）治国（地域の整備・地方自治）平天下（国家の独立）。いまの言葉で表せば、「日本の平和経営はまず国民ひとりひとりの自己確立からはじまる」ということである。

金次郎はこのコースを辿ろうと考えた。そしてこのプロセスの各項目に「責任」を加えた。個人

の責任・家庭の責任・地域の責任・国の責任だ。いってみれば各過程における自治だ。この自治実現の手段としてかれは「譲る（余ったものを他に分ける）」という、ヒューマンな方法を考えた。これが金次郎の復興法で、「報徳仕法」と名づけられた。余ったものを“さし出し合う（金次郎の言葉を使えば推譲）”という精神は、日本における「協同組合精神のはじまり」として、2012年の国連主唱による“国際協同組合年”の諸行事でも、大きな話題になった。

## 天の理と人間の理

金次郎はこの考えで日本各地の疲れた農村復興の指導に当たったが、その基本的心がまえは“自然を愛し自然にまなべ”だ。そのために「自然の立場に立とう」ということであった。

たとえば農民は愛の心をもって土を耕し、種を蒔く。これを農民の徳という。それを感じた土は種を育てりっぱな作物にして農民に返す。これを土の徳という。人間と土との徳の“さし出し合い”だ。これを拡大すれば社会は“温かい心・やさしい心”で満たされ、ユートピアになっていく。金次郎の希う“一円融和”の世界だ。そうなれば少なくとも人災は少なくなっていく。ひとりひとりが相手の立場に立って、

「こんなことをしたら相手はどれほど傷つくだろうか」

と思えば、とくに災害の原因になる行為も控えるにちがいない。というのが金次郎の地域指導の

心がまえだった。そして、

「それにはまず自然を愛し、まなぶことだ」

と告げた。土・水・風を愛し、それぞれの立場に立ってむかいあうことだ。

「譲る」というおこないには「恕（じょ）」の気持が必要だといわれる。恕というのは「相手の立場に立ってものを考えるやさしさと思いやりのこと」と辞典では説明している。

人間同士ではもちろん欠くことのできない要件だが、自然に対しても同じだ。いやものいわぬ自然に対してこそ、この気持が必要なのではなからうか。

もともと私がこんなことを考えはじめたのは、最初に書いたロバート・デ・ニーロのアメリカの消防職員映画で、不気味に床を這い壁を這い上る火災の姿をみていて、

「火にも意志があるのではないのか」

と感じたことがきっかけだ。そして同時に思ったのが、「その意志はとめられないのか」

ということだった。二宮金次郎は夏になって育った稲をみた。同時に脇で育った雑草をみた。金次郎は考えた。

- ・稲と雑草を共に育てたのは天の理だ
  - ・天の理に区別はない。しかしそれでは人間は困る
  - ・人間は稲を残し雑草を引き抜く。これは雑草の生命を絶つことで、人間の理である
  - ・だから人間の理は天の理に背くこともあるのだ
- 炎の生命を絶つことも同じ理になるだろう